

## 四国初！市と税務署が 合同で申告を受け付け

阿南市と阿南税務署は、納税相談の効率化と申告者の利便性向上を図るため、平成23年の所得にかかる市・県民税および所得税の申告受付を同一会場で行うこととし、2月16日から阿南市商工業振興センターにおいて合同で申告受付を行いました。

受付会場には、確定申告書を作成するテーブル、申告内容をパソコン入力するテーブル、市・県民税の申告窓口が設けられました。申告に訪れた人は、申告書の作成度合いや申告の内容に応じて係員に案内され、税務署の職員や市、市の職員からアドバイスを受けながら申告を済ませていました。

こうした取組は、四国26税務署管内では初めて。窓口での混雑が解消され、同一会場で申告を済ませられると好評で、来年以降も実施していく予定です。



市役所と税務署の2つの受付看板が並ぶ申告会場のようす。

## 春の一大イベント「活竹祭」 1万人の人出でにぎわう

平成3年10月に「第32回全国竹の大会」が阿南市で開催されたことを機に始まった「活竹祭」は、阿南のやる気・元気・活気あふれる春の一大イベントとして人々に親しまれています。20回目を迎えた今年も、多彩な催しが繰り広げられ、約1万人の人出でにぎわいました。

春の温かな空気に包まれた3月3日、阿南市民会館前には50を超える模擬店が並び、特産品の販売や竹細工づくりなど体験コーナーが催されました。なかでも人気を集めていたのが「あなん丼」。漁獲高日本一を誇る「鰹」を使った丼メニューが手ごろな価格で食べられるとあって、店先には長い列ができていました。

また、四国放送アナウンス部・遠藤彰良さんのコミカルなトークで開幕したステージイベントでは、火付盗賊によるファイアーダンスやレーモンド松屋さんなどによるコンサートが繰り広げられました。歌いながらポーズをとる新感覚なステージで観客を魅了したアン・セゾンの青木成美さん（阿南市出身）は、「ふるさとの温かさを感じます。」と、笑顔で歓声に応えていました。



「曳き出し」の一場面。舞台からは緊迫感が伝わってきます。

## 伝統文化を掘り起こして 地域に活力を

埋もれゆく伝統文化を掘り起こして後継者の育成につなげ、交流の輪を広げようと、2月25日、文化会館夢ホールで「村おこし伝統文化フェスティバル」が開催され、約600人が地域に伝わる民俗芸能などを堪能しました。

この催しは、平成23年度阿南市伝統文化等補助金事業を活用して、伝統文化の継承事業などに取り組む10団体が、その成果を発表する場として開催されました。原の獅子舞保存会（那賀川町）による「原の獅子舞」では、蛇の目の丸傘を差して獅子を曳き出してくる「曳き出し」や、獅子を大蛇に見立ててのたうつ様を演じた「のたうち」の舞が披露され、緊迫感のあるやり取りやダイナミックな舞に、会場からは大きな拍手が送られていました。

## 大阪大学との連携協力 4年目の研究成果を発表



大阪大学大学院工学研究科と連携協力して「ものづくり」や「まちづくり」をテーマに阿南市の活性化を考える取組で、平成23年度事業の成果発表が、2月28日、ひまわり会館で行われ、岩浅市長をはじめ関係者約50人が研究成果について意見交換を行いました。

まちづくり班からは、過去の災害の伝承・被伝承経験に着目した「地域知における災害文化の伝承に関する研究」などが発表されました。大学院生は阿南高専の学生と共同で、福井町湊地区を対象に聞き取り調査などを行い、生活防災の観点から災害文化を伝承する意義を考察。災害文化の伝承経験を取り入れた防災教育の必要性や生活防災の大切さを導き出しました。

また、ものづくり班からは、新産業を創造し雇用を生み出して地域活性化を促すことを目的に「阿南市の地域資源と関西圏中小企業のものづくりを融合した二ユービジネスの創造」についての提案が行われました。3月18日には、福井公民館でまちづくり班による研究報告会も行われました。（※地域知とは、地域で培われてきた知識などのこと。）

## 中国語を学んで 観光客をもてなそう



県南への観光を呼びかける受講生の皆さん。

徳島県と中国湖南省とを結ぶ定期チャーター便の就航が、1月23日から始まったことを受け、県内各地で中国からの観光客を受け入れる準備が進められています。

本市でも、観光地案内ができる程度の語学力を身につけてもらうと、1月11日からひまわり会館で中国語教室を開催。市内外から集まった30人の受講生は、日本と中国との生活習慣の違いや基本文法などを学びました。

23年前に台湾から来日した講師の永本智富さんは、「異国の言葉を感じるためには、何かをしたいという気持ちが必要ですね。」と受講生に呼びかけ、テキストやプリントを用いて熱心に指導。受講生は、発音練習などを繰り返し、テレサ・テンの「時の流れに身をまかせ」を中国語バージョンで歌う練習では、回を重ねるごとに大きな声で歌えるようになっていました。

受講生の中では最年長で、中国によく旅行しているという讃岐章男さん（90歳・黒津地町）は、「旅先で中国人との会話を楽しみたい。」と、最前列に座って熱心に受講されていました。

全10回の教室で語学力を身につけた受講生の皆さん。記念撮影では、「私たちがご案内します」といわんばかりの自信に満ちた笑顔で、県南への観光を呼びかけていました。

## アフガンに届け！加茂谷中の思い

発展途上国など十分な環境のもとで勉強することができない子どもたちに支援の手を差し伸べようと、加茂谷中学校生徒会では、平成19年度からランドセル募金活動に取り組んでいます。今年も55個の使用済みランドセルが中学校に届けられ、3月9日、ジョイセフ（国際援助団体）を通じてアフガニスタンに贈られました。

この活動は、平成18年に行われた「中学生による人権交流会」で、当時の3年生が「戦火の中の子どもたち」を発表したことがきっかけで始まりました。戦時下にある国や発展途上国の十分とはいえない教育環境を知った生徒たちが、「私たちに何かできないか」と発案したのが「ランドセル募金」。

その思いは、今も後輩たちに受け継がれています。使用済みランドセルの回収は、地元の小学校を卒業した生徒を中心に呼びかけ、最近では加茂谷地域以外からも届くようになりました。20個、40個、55個と年々増加するランドセルの前に、生徒たちに笑顔が広がっています。

3月8日、生徒会役員が集まり発送準備が行われました。磨いたランドセルに鉛筆とノートを入れ、一つ一つ丁寧に段ボール箱に詰め込みました。「このランドセルを使ってしっかりと勉強して、世界に貢献できる立派な大人になってほしいです。」と生徒会会長の安富和希さん（2年・加茂町）。みんなの思いがこもったランドセルは、約7千キロの旅を経て、恵まれない子どもたちの手に届けられます。



生徒会役員の皆さん。